箕輪 克美

●平成6年度3次隊／派遣国：ホンジュラス共和国／職 種：電気設備

仕事だけの人生じゃつまらない
今も南相馬市でボランティア活動を続ける

地方病院の電気設備を任せられる人材を育成

日本の産業を支えるさまざまな分野の研究を行うわが国最大級の公的研究機関･産業技術総合研究所（産総研）環境安全本部に勤務する箕輪克美さんが、青年海外協力隊に参加するきっかけとなったのは、電車の中吊り広告だった。

「東京の電気工事会社に勤めていた時でした。そろそろ地元の茨城に帰らなければと思っていて、何かやり残したことはないかと考えていたんです。そんな時、募集広告が目に入りました。」

箕輪さんは振り返る。説明会に参加すると「コレだ」と思い、迷わず試験を受けた。

派遣国はボツワナかホンジュラスの2カ国が示された。ボツワナでの仕事はエンジンを使った自家発電機の整備だったが、得意分野ではないと考え、専門知識や技術が生かせる可能性が高いと思えたホンジュラスを選んだ。

中米の中部に位置するホンジュラス共和国。赴任地は地方都市の公立総合病院で、現地人のカウンターパート（国際協力の場における現地の対応相手＝C/P）と共に電気設備の保守、点検、維持管理を任された。

「電気が通っていない町でした。病院には発電機がありましたが、診療時間が終わると止まってしまいます。急患が来ると慌てて作動させるといった具合でした。発電機は安定していないため、手術中に電気が止まったらどうしようとヒヤヒヤしました。」

C/Pと同じ目線に立って電気の理論を伝える

病院の電気設備を安心して任せられる人材の育成は箕輪さんの任務の一つだった。日本で電気設備を扱うには資格が必要で、法に定められた手順もある。C/Pは電気設備に対する一定の知識は持っていた。しかし、箕輪さんは基本的な理論を知っておく必要があると考え、勉強の場を設けた。

「待ち合わせを決めても来ないことの連続でした。半年が過ぎたころでしょうか。教える立場ということで、上から目線になっていると気付きました。」

箕輪さんは押しつけることをやめ、同じ目線に立つことにした。トイレが詰まれば一緒になって直した。燃料は口でチューブを吸い、重力を利用して補給したが、失敗して口に含み、笑い合ったこともあった。理論は電気の作業を一緒にするなかでさりげなく伝え、C/Pはしっかりと吸収した。

心配だった病院の発電機は、JICAに支援経費を要請してバックアップ機を用意した。車のバッテリーを利用して、井戸水をポンプで汲み上げる設備も作った。「壊れたラジオを直したりもしたので、医療機器も直せるだろうと思われてしまう。さすがに精密機器は直せないので、その辺のジレンマはありました。」と箕輪さんは振り返った。

1.現地の子供たちと　2.現場作業活動　3.同僚とビール　4.職場（病院）全景

以前は一人が好きだった今は人づきあいを重視

協力隊は各国にコミュニティがあり、日本人同士でふれあえる時間も多い。しかし、箕輪さんのように地方に配属された隊員は参加が難しく、より地域に溶け込む必要があった。現地の言葉であるスペイン語は、2カ月の派遣前訓練と3週間の現地研修で大丈夫だったのかを聞くと、

「何とかなるもんですよ。現地の人とビールやラム酒を飲んだり、ギターで歌をうたったり、楽しく交流できました。ホームシックはまったくなかった。現地の子どもたちと遊んだことは、楽しい思い出として残っています。」

と懐かしむ。協力隊の活動を通して、自分自身が変わったと話す。

「元々は一人でいるのが好きでした。でも、協力隊を経験して、人と人とのつながりや家族の大切さを重視するようになりました。」

帰国後は民間の工事会社に勤務、結婚もした。単身赴任も含めた仕事ずくめの生活は、以前の箕輪さんなら何でもない事だったが、家族との時間を大切にしたいという気持ちは日に日に増していく。その後、以前に仕事をした産総研が施設整備を担う職員を募集していることを知り、試験を受けた。

「産総研が改組によって自主営繕を行うようになり、施設専門人材を必要としていること、自分の経験を活かし、かつ、研究を施設整備の面から支える大切な仕事であると思いました。」

入所5年を経過し、現在は環境安全本部環境安全企画部施設計画室長として手腕を振るう箕輪さん。施設整備全般を管理する立場となり、部下の育成に取り組んでいる。

東日本大震災で再燃したボランティア魂

平成23年3月11日の東日本大震災は、眠っていた箕輪さんのボランティア魂を呼び覚ました。何かできることはないかと思い、4月にはいわき市で災害ボランティア活動に汗を流していた。

「災害の大きさから、個人ができることは微々たることだと思いました。その中で何かできないか、何か続けていこうと考えました。」

箕輪さんは青年海外協力隊の茨城県OV（Old　Volunteer）会に呼び掛け、栃木県の青年海外協力隊OB会と連携しながら除染ボランティアを開始した。現場のニーズを聞きながら、福島県各地の除染作業や陸の孤島となっていた南相馬市の放射線測定を行った。地道な測定を続け、放射線量が強い場所のマップづくりの支援を行った。

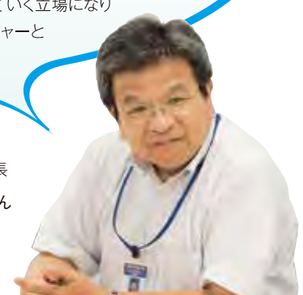
現在は、NPO「南相馬ボランティア活動センター」のボランティアとして、月1回、南相馬市へ足を運び、住民がいつ帰宅してもいいように、留守宅の維持･管理を行っている。

「仕事だけの人生じゃつまらない」と箕輪さん。南相馬ボランティア活動センターでは、ボランティア参加者を募集している。
http://ameblo.jp/v-home-net

VOICE

職場の上司より

産総研本部は事務系の人間が多い組織です。施設専門人材として、知見のある職員を採用することになり、その先駆けとして採用されたのが箕輪です。技術系の人は、じっくり考えて結論を出す人と、経験をベースに直感と閃きで答えを出す人がいるように思います。彼は後者です。仮に方向が間違っていたとしても、修正する能力が高い。これは協力隊での経験というより、資質の問題かも知れません。この能力があったからこそ、制約が多かったであろう協力隊で活躍できたのだと思います。人間関係に長け、部下の信頼も厚い彼が、室長として組織をマネジメントしていく立場になりました。専門知識をもつ新しいタイプのマネジャーとして、注目を集めています。



産業技術総合研究所
環境安全本部建設部 部長
五十嵐 直幸さん

海老澤 加奈

●平成26年度1次隊／派遣国：グアテマラ共和国／職 種：栄養士

地域の人々に向けた温かみのあるマニュアル 画期的で分かりやすいと全国に波及

グアテマラの国策だった 栄養失調児の削減

栄養失調児の削減という要請を受け、海老澤加奈さんがグアテマラに赴任したのは平成26年の7月。赴任先は首都から南に約120km、エルサルバドルとの国境に近いフティアパ県だった。

「グアテマラは国を挙げて栄養失調児の削減に取り組んでいました。現地のカウンターパート（C/P）はフティアパ県で唯一の栄養士で、技能も知識もある方でしたが、会議や打ち合わせに追われて現場にまで手が回らず、看護師に状況を聞くだけという具合でした。対人業務で栄養失調児と向き合う人手が絶対的に足りなかったのです。まずは、栄養士の技能や知識を移転できる人材を増やすことが必要だと感じました。」

栄養失調児の削減では、乳幼児の状態をトータルで見る乳幼児健診を導入したほか、重症化を防ぐため、早期発見、早期治療に努めた。また母親の栄養状態が悪いと栄養失調児になる可能性が高いことから、妊婦さんのための教室も企画した。さらに、ヘルシーな日本食を販売し、売り上げを栄養失調児の食事に回したりもした。

「妊婦さん教室では失敗も経験しました。現地の人は事前に告知しても、来たい時に来てしまう。こちらは午後に教室を予定しているのに、仕事が煩雑な午前中に来てしまうんです。」

海老澤さんはC/Pらと相談し、「妊産婦向け栄養パンフレット」と「保健従事者向け妊産婦栄養指導マニュアル」を作って全県に配布することにした。現地のマニュアルは文字のみで構成されることが主だった。しかし、字が読めない人がいることも考慮し、指さしで説明しても分かるようにイラストを多用した。手作り感あふれる温かみのあるマニュアルは、後にC/Pが全国規模の会議で紹介したところ、画期的なマニュアルだとして、全国に波及することになった。

1.地域で始めた糖尿病患者向けの教室「糖尿病クラブ」 2.栄養失調児の家庭訪問
3.地元ラジオで活動（乳幼児健診や栄養教室の開催）紹介をした時のもの 4.友人の家で日本食パーティ

中南米の人たちと うまく仕事をする秘けつ

グアテマラの公用語はスペイン語。海老澤さんの主な仕事は栄養失調児やその母親と向き合って指導すること。そのため、スペイン語が話せなければ仕事にならない。ラテンアメリカの人たちはとにかく話し好きだ。職場で同僚が長々と世間話をしているのを見て「ヒマがあるなら仕事すればいいのに」と思うことも度々あった。一方で、その輪に加わることで、言葉の壁を乗り越えるための、格好の勉強の機会にした。

「対人業務や教室などで私がスペイン語で説明していると、同僚がスペイン語で同時通訳してくれました。」

職場での長話は人間関係の構築にも大いに役立ったという。

当たり前にできると思っていることが、途上国ではうまくいかないことも多い。担当を持ち、責任を持って遂行する日本人には大きな悩みにもなる。海老澤さんは「人を頼るようになるといいみたいです。グアテマラでは、迷惑を掛け合って当たり前なんです。」と、ラテンアメリカで良好な人間関係を築く秘けつを教えてくれた。

生活習慣病が蔓延 対策の必要性を訴える

栄養失調児を減らす業務を続けながら、海老澤さんが心を痛めたのは生活習慣病が蔓延していることだった。糖尿病、肥満、高血圧は国民病と呼べるほどだった。現地の人々の主食はトウモロコシが原料のトルティーヤ。炭酸飲料の摂取も多く、野菜不足もあった。こちらは対策が取られておらず、患者は薬に頼るのみだった。

青年海外協力隊は、赴任1年経過時に現地事務所で報告会がある。海老澤さんはデータを使って糖尿病対策の必要性を訴え、関係者の共感を得た。

まずは現地のガイドラインを学ぶため、スペイン語で書かれた資料を辞書を引きながら調べた。「糖尿病クラブ」という名の講習会を企て、ラジオなどメディアの協力を得ながら参加者を募った。しかし、参加者は数人だった。何とか糖尿病患者や予備群を集める方法はないかと試行錯誤し、キリスト教会なら人が集まるのではと考えた。

「教会なら人々の抵抗が少ないはずと思いました。交渉に行くと、教会役員の多くが糖尿病で悩んでおり、快く受け入れてくれました。」と海老澤さんは笑う。講習会では、それぞれに合った食事を紹介するとともに、野菜料理のレシピなども指導。参加者もみるみる増え、100人規模の講習会となった。

栄養指導で好評を博したマニュアルを、糖尿病指導でも作って欲しいという要望もあったが、帰国が間近な段階で、作成は後任に託した。今は完成の声を心待ちにしている。

現場の意見を大切にし 何ができるか考えたい

小学生の時、授業で国際問題に関心を抱いた。中学生の時に「海外で仕事をしてみたい」と夢を描き、青年海外協力隊の活動に興味を持った。高校時代には国際協力と栄養士を進路のキーワードに掲げ、大学のパンフレットに栄養士を目指しながら青年海外協力隊に参加した人の記事を見つけ、好きな職業の中で国際協力ができる道を見つけた。大学卒業後は茨城県職員として県内の保健所に勤務。数年の経験を積み、現職参加制度を利用して青年海外協力隊に応募した。

一つの目標を実現して帰国した海老澤さん。職場は保健所から茨城県保健福祉部保健予防課に変わった。

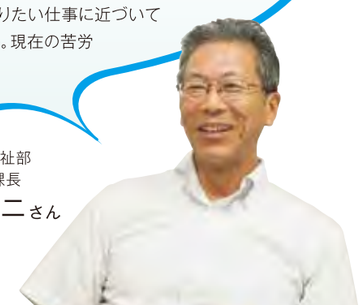
「グアテマラでは、とりまとめる側と現場の両方を経験することができました。上層部から下りてくる指示で、現場が混乱することも多かった。協力隊では、現地の人と同じ目線で仕事ができた事が何よりも素晴らしい経験でした。」

最も重要と考える現場は少し遠くなった。「現場の意見を吸い上げながら、何が必要か、何ができるか」を考えていきたいと現在の心境を語る。時間ができれば、現場に赴き、現場の様子を肌で感じたいと考えている。

VOICE

職場の上司より

茨城県保健福祉部保健予防課は、県民の健康・疾病対策などを行う部署です。彼女は健康づくりグループの技師として、食生活や栄養改善の仕事を担っています。ボランティアに積極的な人は、明るさや積極性を本質的に持ち合わせていると感じていました。一緒に仕事をしてみると、やはりその通りで、責任感は強い。県庁で働くことは、出先機関である保健所で働くこととは違います。本庁や議会などとの兼ね合い、予算対応など、さまざまな仕事があり、進め方も独特なんです。彼女は今、相当に苦労していると思います。でも、それを乗り切れば、本当にやりたい仕事に近づいていけるはず。能力は高く、発想力もある。現在の苦労は、必ず花開くはずです。



茨城県保健福祉部
保健予防課 課長
根本 雄二さん

関澤 英勝

●平成21年度2次隊／派遣国：パプアニューギニア独立国／職 種：コミュニティ開発

途上国の村落を発展させた貴重な経験を地域サッカークラブで再現させようと日々奮闘

違う世界を知れば行って体感してみたい

つくばFC（フットボールクラブ）で経営企画部長を務める関澤英勝さん。世界一幸せなクラブづくりを理想に掲げ、日々、奮闘している。

新しい世界、新しい興味に向けて行動を起こすのが関澤さんの気質のようだ。大学時代にはサッカーの指導に興味を持ち、ワーキングホリデー制度を活用してニュージーランドに渡った。

「現地に行くと、お前の英語力では指導はムリと言われました。お金を得ることを目的にワーキングホリデーでビザを取得したのに、気がつけば選手としてグラウンドを走り回っていました。指導といえば、下部組織の子どもたちを教えたことでしょうか。」と懐かしむ。

大学を卒業すると茨城県内の金融機関に就職したが、仕事に慣れはじめると、関澤さんの興味の虫が騒ぎ出した。

「日本で働くということが分かってくると、これが世界のスタンダードと思っちゃいけない。違う企業、違うルールを体感したいと思いました。ショックを受けることができるのは、日本と違うところ、経済レベルの違う途上国だと思い、青年海外協力隊に応募しました。」

任地は南太平洋のパプアニューギニアで、職種は村落開発普及員（現コミュニティ開発）。パプアニューギニアには800もの民族・言葉があると言われるが、公用語は英語とそれをベースとしたトク・ピシン語だった。

現金収入を増やすこと簿記を教えることが任務

村落開発普及員としての任務は、設立されたばかりの農業組合的な組織を現地の役人と協力しながら現金収入を増やすこと、さらには簿記を教えることだった。しかし、足し算も引き算もできない人が多く、「家計簿的なもの」を継続的に教えたという。

地域の主な産業である農業は、採取を中心としていた。栄養のある米の栽培も試みてはいたが、精米など手間が掛かることから、根づいてはいなかったという。農作物を売り、収入を得ても管理はずさんで、何もしていない人の酒代になっていたりもした。

「がんばる人と有力者を見つけること」が、JICAボランティアの基本だと語る関澤さん。同じ時期にJICAのシニアボランティアがティラピア（鯛に似た川魚）の養殖技術を教えていたため、漁業に携わる人々の仕事に対する意識は高かった。また、養鶏業、花卉業などの分野にもやる気を見せる人は多かった。

関澤さんは業種別にリーダーの育成、帳簿の付け方の指導、経営指導などを行った。人を集めるために当初はお菓子などを用意したところ、熱心に聞き入る人は増え、後にお金を支払って受けるセミナーも開いた。政府関係者、鉱山の経営企画に携わる人、プランテーション実践者などの話を聞くセミナーで、参加費は月収の1割近い高額なものだったが、約40人が参加した。

「お金を払えば本気になるだろうという考えもありました。地域は男尊女卑の風習が残る地域でしたが、ランなどの花を売るグループは女性が中心でした。働く女性たちが旦那を巻き込み、リードするケースもありましたね。」

関澤さんは感慨深げに話す。

地域の補償金を活用し舟やモーターを購入

経営センスも光った。地域はオクテディ鉱山の汚染被害地区で、補償金があることに目をつけた。販路を拡大させるため、村を流れるフライ川を10時間ほど行った所にあるマーケットに収穫物を出品させようと、補償金を申請し、舟や発電機、モーターなどを購入した。

「いきなりお金やモノを与えることは望ましくないと思われる人もいるでしょう。しかし、途上国に到来する発展の波は止められません。村の人たちは補償金の存在を知らなかった。現地の人ができないことをするのが私たちの使命。過剰にならない程度に必要なモノを与えてきっかけを作り、やる気のある人が規範となって発展させていけばいい。」

地域には病院がなかったため、舟は地域の病人を街に運ぶためにも役立てられたという。

協力隊活動以外の時間はサッカーを楽しんだ。街の社会人チームの練習に参加したが、一向にボールを使う練習が始まらない。聞けば貴重なボールは試合用に取っておくためだった。関澤さんは自らボールを購入するとともに、以前から知り合いだったつくばFCに連絡し、ボールとユニフォームを寄贈してもらった。「自分の足技を見せて、尊敬されたい気持ちもあった」と笑う。

1.任地西州キウンガにて地元有志に「ビジネスアイディア講習会」を開催　2.任地キウンガでは、川を利用した移動が多い 3.村の巡回指導した時の集合写真　4.教会グループに「家計簿のすすめ」講座を開催

つくばFCを人々の交流拠点に

帰国後は民間企業に勤めたが、仕事が合わずにストレスが積もり、協力隊の時にもお世話になったつくばFCの門を叩いた。つくばFCはJリーグやなでしこリーグ参戦を視野に入れた地域のサッカークラブ。ここで関澤さんは水を得た魚のように輝きを取り戻す。

関東1部やチャレンジリーグに在籍するチームの試合の集客アップを図る一方、選手の奮起と観客の厳しい目を求めるため、有料試合に挑戦するほか、地域のネットワークづくりに飛び回った。サッカーくじtotoのスポーツ振興のための助成金を活用し、イオンモールつくば敷地内にクラブハウスを完成させたり、筑波学院大学の人工芝グラウンドを実現させたりもした。

「つくばFCはスポーツをしない人にも開かれたクラブです。JICAとも提携していますので、国際協力に興味がある人も、ぜひ訪ねてみて下さい。スポーツを中心に人々の交流拠点にしていきたいと考えています。」

パプアニューギニアでの経験は、つくばFCを躍進させるための大きな原動力となるはずだ。

VOICE

職場の上司より

かつてのつくばFCは、サッカー指導者中心の組織でした。彼の加入でビジネスマネジメントの視点が加わったことは心強く、totoの助成金申請の立役者になりました。コミュニケーション能力が高く、周りの空気を和ませてくれることも彼の才能です。これは先天的なもので、協力隊でさらに自信をつけたのではないでしょうか。他の指導者が二の足を踏む難しい指導も買って出てくれます。社会人クラスの参加者が減った時も、知的障がい者へのサッカー教室にも、関澤が名乗り出てくれました。職業や年齢が多岐にわたる人々とコミュニケーションを築き、今ではたくさんの参加者が集うようになっています。

NPO法人 つくばフットボールクラブ理事長
株式会社 つくばFC 代表取締役
石川 慎之助さん

西尾 直美

●平成16年度1次隊／派遣国：ドミニカ共和国／職 種：小学校教諭

異国での算数指導法を確立するために 同僚の教材発掘を我慢強く見守る

疲れていた自分に喝 視野を広げ、経験を積もう

「筋道の通った先生。言いにくいこともしっかり言ってくれる。」と教え子が語る中学教師・西尾直美さんは、平成16年から現職教員特別参加制度※で青年海外協力隊に参加した。

現職教員特別参加制度は、①失職せずにJICAボランティアに参加できる。②3月末に任期終了の派遣のため、新学期（4月）から職場復帰できる。③日本の学校教育にJICAボランティアで得た知見を還元しやすくなった。等、参加教員・学校にとってのメリットがある。

「家と職場を往復するだけの日々が続いていたんです。疲れていました。教員が疲れていてはダメだ。経験を積み、視野を広げなければと考えました。」

西尾さんは協力隊への参加の動機を振り返る。協力隊への参加が決まったのは3度目の応募だった。2度目であきらめようとしていたが、「挫折や失敗を知っている教師がいてもいいのでは。その経験は教え子のためになる。」という保護者の言葉に励まされた。

※平成13年度に文部科学省と外務省、JICA（当時は国際協力事業団）、各都道府県教育委員会などの協力により創設された制度。日本での教育経験を活かし、教育分野での国際協力を行い、帰国後に自身の経験を教育現場に還元することを目的にしている。

先生が変われば 子どもも変わるはず

派遣国はカリブ海に浮かぶドミニカ共和国。職種は小学校教諭だった。専門は英語だったが、協力隊に英語を教える職種はない。算数の指導プログラムの確立が西尾さんへの要請だった。うまくいかないことが当たり前なのが彼女の常だが、「教えるという以前の問題でした。政権が変わって学校は機能しておらず、閉鎖状態が続いていました。」

赴任して最初に取り組んだのは生徒が学校に来られるようにすることだった。青年海外協力隊茨城県OV会に資金援助を呼び掛けてトイレを設置するなど、最低限の環境を整え、児童の家庭訪問に明け暮れた。

「学校に来られるようになってからも席に着かない、外に出るといった具合の好き勝手放題。縁故採用で割り算ができない教師もいました。」

算数の授業は黒板の文字をノートに写すことが中心で、ノートの出来栄えが評価されていた。8歳の時、進級するための試験があるが、留年する子どもが続出するのも当然だった。何回も留年すると学校に来なくなり、ストリートチルドレンになる負の連鎖もあった。

「まずは教師の質を高めよう。先生が変われば子どもも変わるはず。」西尾さんは四則演算の指導を徹底し、校内研修が開ける環境づくりに取り組んだ。教育に情熱がある同僚も協力してくれた。JICAからの活動資金を用いて、問題がプリントされたワークシートを（西尾）自ら作成し、3つのクラスで導入すると、成果はすぐに現れ、他の教師も大きな興味を抱いた。

1.2年間、共に授業づくりを行ってきたカウンターパート達（校長、教頭、教務、担任） 2.帰国後、日本の中学校での寄付（鉛筆や消しゴム）を学校へ届ける 3.カウンターパートが考えた教具（アメの棒を数え棒に、牛乳パックをケースに） 4.カウンターパートによる模擬授業の様子

力のある人を見つけ 波及させることが大切

算数の教え方を確立するのが西尾さんら協力隊の役割。ドミニカ共和国では説明が中心だが、日本ではおはじきなど具体物を使って理解させる。メンバーの中には日本の算数セットを取り寄せる人もいた。「なるほど」と思ったが、中南米で算数を教える協力隊員は、教材を中南米に浸透させる目的もあり、現地にあるもので教えることが重要と考えた。信頼できる同僚に話すと、興味を示し、熱心に教材を探しはじめた。試行錯誤を経て、あちこちに落ちているキャンディーの棒を使おうと提案された。

「現地の同僚が考え、見つけてくれたことが何より嬉しかった。」と西尾さん。力のある人を見つけて授業を作り、公開して波及させる。これが途上国の教育を向上させるためのメソッドだと確信した。

現職参加教員の経験を 教育の場に還元しよう

現在、現職参加教員の経験を教育の場に還元していくことを目的に「現職参加教員ネットワーク（仮称）」を立ち上げた。また、子どもたちに向けて、一つの国をテーマに国際理解教育を進めていこうと思案中だ。現在はモンゴルにいる現職教員隊員と連絡を密にとり、モンゴルと日本の関係を学ばせるとともに、スカイプなどを利用して、子ども同士を交流させていこうと、青年海外協力隊経験教諭が集い、話し合いを続けている。

「日本の子どもは優等生だと思う。例え劣等感を抱いたとしても、世界として見れば劣等生ではない。恵まれた国に生まれたのだから、世界に何らかの還元をしていく必要があり、皆、その能力を持っている。」

帰国して数年後、途上国の貧しい子どもたちに対し、何かできることはないかと中学生に投げかけたことがあった。返ってくる答えは「募金」だった。募金しただけではそのお金がどう使われているかを知ることはできない。西尾さんはお金ではなく、鉛筆、消しゴム、定規を募った。それらを持ってドミニカ共和国に飛び、現地の子どもたちが喜ぶ様子を伝えた。生徒は人のために役立つ充実感を味わった。短い鉛筆を提供したことを後悔する生徒もいた。「役に立ちたいなら相手の喜びをイメージすることが大切」と学んだ瞬間だった。

教師という職業に 今は喜びを感じている

ドミニカ共和国で教鞭をとっていた時、母親が訪ねて来た。現地の様子を見て「昔の日本に似ている。」と話した。子どもたちは外で元気に遊んでいる。周りの大人は「手は掛けずに気にかけている。」子どもが成長するうえで、そんな環境がうらやましく思えた。

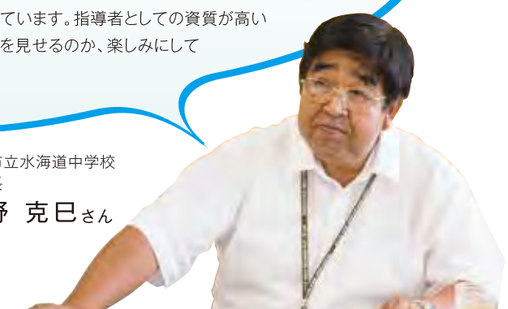
帰国後はすぐに成果を求めることをやめた。今、教えていることを生徒はどこで役立てるのか、どう感じて人間形成にどう生かすのかを重視するようになった。生徒が20歳くらいになったとき、「先生からこんな事を言われた、教えられた。」と、思い出してもらえればうれしいと話す。

学生時代はマーケティングや経営に関わる仕事に就きたいと思っていた。今は「人を育てるクリエイティブな仕事」と、教師という職業に魅力と大きな喜びを感じているという。

VOICE

職場の上司より

水海道中学校では平成28年度から3年間、「ユニバーサルデザイン教育」の推進を教育の柱に据えています。研究主任としてその中心を担っているのが西尾先生です。従来の障害あるなしにとどまらず、通常の子どもたちの生活にもプラスになる教育にしていきたいという考えがあり、西尾先生の協力隊の経験は必ず役に立つと考えています。また、英語教師としてだけでなく、2学年の学年主任としてもリーダーシップを発揮しています。中学2年生は心が揺れ動く難しい時期ですが、生徒からも「優しさと厳しさを持ち合わせている」と信頼されています。指導者としての資質が高いので、今後、どんな活躍を見せるのか、楽しみにしている教師です。



常総市立水海道中学校
校　長
岡野 克巳さん